

外国語語彙獲得研究の展望

教育心理学コース 黒 沢 学

A Review on Vocabulary Acquisition in Foreign Languages

Manabu KUROSAWA

Recent studies on vocabulary acquisition of native and foreign language and comprehension process of figurative language are reviewed. Then the idea of naive 'Literality', which implicitly assumes that learning vocabulary means remembering labels is criticized. Another definition of learning vocabulary and context is discussed, and a model of vocabulary learning in context using concept learning model is proposed.

目 次

- I はじめに
- II 問題
 - A 語彙の直接教育は可能か
 - B 語彙の獲得とは何か
 - C 比喩的な言語理解
 - D その他の外国語に特有の諸問題
 - E まとめ
- III モデル
 - A 文脈の定義
 - B 外国語に特有の問題
 - C 語彙の獲得と使用
 - D 必要な認知的機構
 - E LIP (Label-Instance-Prototype) 仮説
 - F さまざまな現象の説明
- IV さいごに

I はじめに

人間は乳幼児期に自然な環境においてほぼ例外なく言語を獲得することができる。また青年期以降でもそれ以外の言語を外国語として学習することが可能である。ここでは外国語 (Foreign Language) とは、自然な環境で獲得される母語と異なり、意図的な学習が必要となる言語を指す。

外国語と母語という異なった2つの言語間では、用いる語彙と統語法という2点で異なっている。しかしこの2点は過去同じ程度に研究者の関心を引いてきたわけではない。外国語の学習において語彙の獲得の問題はあま

り問題とされてこなかった (今井, 1993)。1993年に外国語の語彙学習を展望したMaignashca (1993) は、言語教育においてコミュニカティブ・アプローチが構造的シラバスにとって替わったときに語彙の問題は周辺的な問題とされたことを指摘して、統語法の研究に較べごく最近まで外国語の教育のうち語彙は二次的な役割しか果たしてこなかったと述べている。そしてまたMaignashcaは文法の研究に比すべき包括的な参照枠組みを創る必要があることを説いている。この主張は十分に首肯できるものであろう。

さて、本稿がこの1993年の展望を引用し、さらにはその論旨に賛成しながらも、なお外国語の語彙の獲得についての展望するのは、屋上屋を架すという誹りを免れないかもしれない。しかしMaignashcaの参照枠組みは抽象的・形式的な理論ではなく、実際的な問題を扱う操作的な枠組みである。しかし本稿は逆に抽象的・形式的な理論の枠組みについて検討し作業仮説としての語彙学習モデルを提案する。

本論に入る前に、本稿の議論の対象について限定をする。母語においては語彙獲得のハードルが単一ではないという主張がある (Chall, 1987)。また、一般に内容語は開級 (Open class) であってその獲得が生涯続くが、機能語は閉級 (Closed class) であって獲得の初期の段階で獲得される。このことは語彙の獲得という現象が単一の原理で説明されるべき現象ではなく、複数の説明が必要であることを示唆している。このことから本稿では進んだ段階の外国語の学習者 (Advanced Learner) が内容語を獲得するという現象のみを対象として扱う。

II 問題

前項で述べたような語彙研究と統語法研究との非均衡は外国語についての研究に特有の問題ではなく、母語の研究においても変わるものではない。しかし母語における語彙の獲得の研究は外国語における語彙の獲得の研究にとって示唆的である。それは単に両者が似ているという点にとどまらない。従来の外国語における語彙の獲得に関する研究のほとんどは外国語に特有の問題、本質的に外国語の語彙の獲得のみがもつ難点を指摘してこなかった。言い換えれば、そのモデルは外国語に対してのみならず母語の語彙の獲得についても適用可能なものであった。外国語の語彙の獲得はその母語の語彙の獲得モデルが外国語に対して適用されたものにすぎない。そこで、この展望はまず母語における語彙とその獲得について過去の研究を整理するところから始まる。

近年の母語における語彙の研究においては、(1)語彙を直接教育することが可能かどうか、(2)語彙の獲得とは何か、どのような情報が語彙の獲得を支えているのか、(3)比喩的な(Figurative)語彙である熟語(Idiom)はどのように理解されているのか、ということをめぐる議論が進行している。そこでまずこの3点についての近年の研究を概観し、外国語の語彙獲得のモデルが満たすべき問題点を整理する。

A 語彙の直接教育は可能か

子どもが特別な語彙教育なしで膨大な語彙を獲得できるということは幼児の語彙獲得研究における出発点である。また英語の母語話者は小学校段階で80000以上の語を獲得しているという報告がある。実際の数値を推定する際にはさまざまな問題が伴うのでこの数値をどう評価するかはさておきとしても、いずれにせよ膨大な数の語彙が獲得されているという事実に対する研究者はいない。そして膨大な数の語彙が学習されているということは明らかに学習者が文脈から語彙を推論することができることを示している、という主張がなされている。この主張は全ての語が文脈から学習することが原理的には可能であるということを含意している。つまり文脈からの語彙の獲得モデルは全ての語彙の獲得を説明するものでなくてはならない、ということが要請される。

Sternberg (1987) は文脈から語彙の意味を推論する過程を提案した。Sternbergのモデルは、文脈からの知識獲得過程に(1)新奇な語彙に関連する文脈を選り分ける選択的コード化、(2)関連する文脈を作業的な定義に結合

する選択的結合、(3)新奇な語についての知識を既有知識と照合する選択的比較過程、の3段階の処理を仮定し、提示された新奇な語を脱文脈化するための方法を提案するものである。またこれらの処理機構が文脈から適切な手がかりを受け取ったときに発動されること、それは新奇な語の生起数や密度、文脈間の変異などの要因によって発動されやすさが異なることなどが仮定されている。しかし推論を行わせるように文脈からの手がかりを操作して行った語彙の意味の推論についての実験結果においては、モデルのフィットは必ずしも高くはなく、Sternbergは脱文脈化というアイデア自体は支持されたもののまだ多くの要因間の交互作用を検討する余地があることを指摘している。

一方、学校場面において直接語彙を教育する方法やそのプログラムが提案されている。代表的な教育プログラムとしてはBeck, McKeown and Omanson (1987)の反復提示と動機づけを高める方法を中心としたプログラムがあり、語彙の教育法としてはPressley, Levin, and Delaney (1982)の'キーワード法'がある。

このうち動機づけによる説明ではなく認知的な説明を行っているキーワード法とは、新奇な語彙を提示するときに、その新奇な語の一部を、その一部と音韻的・意味的に関連するような具体的な語のイメージと連合させるという手続きによる記憶術である。この記憶術による方法は適切な教示を施せば小学生から成人まで一貫して語の再生成績に効果があることが報告されて、クレイクとロックハートのいわゆる記憶の処理深度仮説によって裏付けられると主張されている。この現象については、これを提唱しているPressleyもこの記憶術が想起の段階に効果をもつことを認めている。つまり基本的には対連合学習の枠内で説明ができる現象であると考えられる(想起のモデルとしてはPavio and Desrochers, 1980。これに基づく想起の研究としては松見, 1992)。

こうしてみれば、文脈からの語彙の獲得モデルと直接教授法による語彙の獲得とは特に矛盾した見解でないことがわかる。見解の相違は両者の帰無仮説の相違でしかない。つまり直接教育が可能であるという立場の帰無仮説は「教育プログラムの効果がゼロである」ことであり、直接教育の効果があるというのはこの帰無仮説を否定できる、という主張が行えるに過ぎない。これは弱い主張であるが、採用した教示の効果がランダムでない限りはこの主張をすることができるという意味では現実的な主張である。

一方、日常的な文脈からの学習を主張する立場からは実質的に意味のある帰無仮説を立てることができず、語

彙の獲得の全てを一般的学習過程によって包括的に説明するだけの十分な説明力を必要とする。その点で本稿の目的である包括的な外国語語彙獲得モデルの定式化の最初の問題となる。つまり、外国語の語彙獲得モデルは、文脈とは何か、文脈からの学習機構はどのようなものか、という点を明らかにするものでなければならない。

B 語彙の獲得とは何か

次いで語彙の学習の問題になっているのは、語彙の獲得とは何か、そしてどのような情報が語彙の獲得を支えているのか、という問題である。語彙の多くは確かに文脈から学習することができる。しかし語彙を定義から学習することもできる。つまり辞書によって語彙を獲得することは可能である。外国語の場合はさらに辞書からの獲得の割合が多いことが推測されるが、辞書を用いなくても語彙の獲得は可能である (Knight, 1994)。それでは語彙を獲得するにはどのような情報が必要なのだろうか。そしてそもそも語彙を獲得するとはどのような事態を指すのであろうか。この問題についても研究者間で完全な一致がみられていないのが現状である。

外国語に限っていえば、この問題に対して最も極端な立場は語彙の獲得は母語と外国語の対連合学習であると捉える立場 (例えば、川上, 1994) であろう。つまり指示対象が同一であるような場合には語彙ラベル間で連合が成立し、それをもって獲得とする立場である。母語の場合は普通は対連合が成立するようなラベルがありえない (常に1対1で置換可能である語はその一方には存在する価値がない) が、任意の文脈における語と置換可能であるようにという置換可能性による定義やなるべく意味の近い同義語の列挙によって定義しようとする立場である。このような情報によって語意が獲得されること、このラベル間の対応づけや置換に成功するようになることをもって語彙が獲得されたとみなす立場が辞書学においてみられる。このような立場を便宜的に古典的語彙獲得観とよんでおく。古典的な語彙獲得観においては語彙の獲得に必要な情報は語彙ラベルとその指示対象ということになる。

このような語彙獲得観がある一方で、1980年代に急速に発達した辞書学 (東, 1995) の立場からは、辞書記述の手法も生まれている。例えば、辞書記述を主に典型性に配慮して作成している辞書 (英英辞典COBUILD) や、中心的な語義を記述している学習英和辞典などがそれである。このような辞書においては、言語によって語の意味を完全に記述することの不可能性が明確化された内容となっている。この立場ではもはや辞書による語彙

の学習は単に対連合学習であるとは言えなくなっている。

さらに古典的な語彙獲得観では説明しにくい研究も存在している。例えば、Fischser (1994) はドイツ語を母語とする学生を対象として英語の語彙の学習についての実験を行った。実験の条件としては文脈から語の意味を学習する条件と辞書から学習する条件の群を作り、新奇な語彙を含む文章を提示して語の意味の学習を求めた後、被験者に獲得した語を用いた文を許容度の評定課題と獲得した語を含む文を翻訳させる課題を課した。すると前者の課題では群間差が見られなかったのに対し、後者の課題では群間差がみられた。この課題による差は古典的な語彙獲得観では説明しにくいものである。

このような立場では、語彙の獲得は概念の獲得となぞらえることができる。つまり自然概念が必要十分条件によっては記述できないように、語彙も必要十分な言語的記述によってはその意味を与えることができない。このことは、語彙の獲得は概念獲得のモデルと並行であるべきことを示唆している。また、概念獲得が漸進的に行われるというのと同じ意味で語彙の獲得モデルも漸進的であるべきである。これが外国語の語彙の獲得の定式化されたモデルがもつべき2つめの特徴になる。

ここで付言しておくならば、概念学習モデルも現在”混沌”と呼べるほど (河原, 1992) さまざまな理論がある。これらは概念の内包を重視する抽象理論のグループと、概念の外延を重視する事例理論のグループへと大別できる (Spalding and Ross, 1994)。このうち語彙の獲得が1事例からでも成立することは事例ベースで機能するモデルのほうがより現実にフィットしやすいことを示唆する。このような事例ベースの概念学習理論をどうモデルにとりこむかが課題となる。

最後に、このような獲得がなされるために必要な情報は何かという残された問題である。以上のように、その語について定義的な特徴を含まないような文の意味の重なりでしか語の意味を表せないことは、この問題が解決不能であることを示している。つまり重要なのは、どのような情報があれば語の意味が獲得できるのか、ではなくてどのような情報からであっても語の意味は獲得できるのはなぜか、という問題設定なのである。

C 比喩的な言語理解

1980年代後半までの比喩的言語研究は、例えば 'kick the bucket' のような熟語が長い単語として直接保持されているのか、それとも個々の語の意味から構成することができるのかという点を主な対立点として行われてきた、といってよい (Gibbs, Nayak and Cutting,

1989)。その結果現在では、全ての熟語の処理はこの2つの側面を共に含んでいること、ことばの字義通りの使い方と比喩的な使い方は連続的であることは研究者間で一致した見解となっている (Cacciari, 1993)。これは母語だけに限られた問題ではなく、外国語話者も婉曲的要求などの非字義的な文章を母語話者と同様に処理していることを示唆する研究もある (Takahashi and Roitblat, 1994)。

その後現在にいたるまで、言語学的にはレイコフに代表される認知言語学と呼ばれる理論を背景として、このような比喩的言語を成立させる機構の研究が現在精力的に行われている。提案されているのは経験に基づく何らかの知識構造がこれらの比喩的な言語使用を支えている、ということである。そして現在この分野で最も重要な主題は、その知識構造が比喩的な言語を理解する段階で用いられる (Nayak and Gibbs, 1990) のか、何らかの認知的な反応を求められたときに用いられるのか (Glucksberg, Brown, and McGlone, 1993) ということである。

この分野の研究は、まず字義通り (Literal) という概念がもはや語彙の研究において有効でなくなっていることを再確認するものである。そしてことばのもつ字義的な意味と、直観的にはそこから派生された用法である比喩の意味の処理とを、同一の機構で説明する必要があることを示唆している。言い換えれば、くり返し提示されて明らかであるような語の意味の処理と、このような文脈で提示されるのは初めてであるような語の (直観的には新しい) 意味とを、さらにいえば既知の語彙を使用することと未知の語彙を獲得することと同じように説明する必要があるということが要請されているのである。

D その他の外国語に特有の諸問題

これまで概観してきた語彙の獲得に関する先行研究のうち、多くは母語における研究であった。外国語の語彙獲得のモデルは母語のモデルと比べ、どのような特徴を必要とするだろうか。

外国語についてのモデルには大きく分けると2つの方向がある。1つは外国語の処理の何らかの水準に母語の (普通は望ましくない) 属性の転移が見られるとするモデルである (例えば, Kilborn, 1992)。もう1つは外国語の処理は母語の処理と基本的に同じメカニズムで行われており、いわば「2つめの母語」として行われているに過ぎないと暗黙に仮定するモデルである (例えば, Fischer, 1994)。

前者は明らかに包括的な外国語の語彙獲得モデルと相

容れない。どのような属性が転移するかどうかは、その母語と外国語が何であるかによって変化するからである。後者は外国語学習の問題が母語の問題と環境の差にすべて還元できるということを意味する。がその命題もまた肯定も否定もし難い。現実には観察される差が外国語の処理システムに依存しているのか、その知識に依存しているのかということはまだ明らかでない。しかし、研究方略としてみた場合は初期のモデルでは質的な差異を強調しておくほうがモデルに関する理解が促進されることが考えられる。そのため、本稿においては処理モデルの中に母語・外国語の差異を組み入れる。

E まとめ

以上のように先行諸研究を概観すると、外国語の語彙獲得の包括的モデルが考慮すべき重要な属性として「文脈を定義すること」「概念獲得のモデルと並行であること」「語彙を使用することと語彙を獲得することを同一のモデルで説明すること」「何らかの形で母語をモデルの中に組み入れること」が浮かび上がる。外国語の語彙獲得についてのモデルは以上の属性を備えていることが望ましい。

III モデル

以下には、前項で議論した属性をもったモデルを提案する。

A 文脈の定義

文脈が言語の理解について重要であることは疑いがない。しかし文脈とは何かということについては明確に定義されたことはない。概観すれば、文脈を広く捉える立場と文脈を狭く限定する立場とがある。前者は世界知識からの推論を許す立場であり、後者は1文の中での統語的・意味的な相互規定性にのみ限るような立場である。このいずれに立つかは研究者によって見解が異なる。しかし作業モデルを構築するという本稿の目的からは、関連する研究からより妥当そうな見解をもって文脈を定義する。

関連する知見に目を向けると、同様の対立は幾つかの分野に見られる。McKoon and Ratcliff (1992) は読みの最中に起きる推論について構成主義的な推論と最小主義的な推論を区別している。前者は時間のかかる方略的な推論であり、テキストに明示的に述べられていない全ての情報についての推論を含む。後者はせいぜい数百ミリ秒でおきる高速で自動的な推論で、局所的な部分で

のみ起きる（例えば、道具的推論）。この両者は厳密に区別することはできないが、ピリシン（1984）に従えば、このように反応時間の異なる処理は異なる処理であると考へたほうがよい。また同様の区別は認知心理学や隣接分野でさまざまに見られる。例えば、自動化における統制的処理と自動的処理、フォーダー（1983）のモジュール仮説などである。これらの知見は少なくとも文脈を狭い文脈と広い文脈に分けて定義することを支持する証拠があることを示している。

次の問題は、このどちらを文脈の定義として採用するか、ということについてである。最少主義の立場からは（McKoon and Ratcliff, 1992）、構成主義的な推論は読みの最中に（オンラインで）自動的に生じるわけではなく、後に推論課題を行う段階になって起きるものであるということが指摘されている。これは語彙の意味の理解が高速で強制的に作動する（フォーダー、前掲書）こととは相容れない性格である。また、構成主義の見解もこのような最少主義の立場からの批判を受けて理論を修正し（Graesser, Singer, and Trabasso, 1994）、読み手の目標や意図といった限定された内容の推論だけが読みの最中にオンラインで起きることを仮定するといったように、オンラインで行われる推論を限定する方向にある。しかし語彙の理解についての推論は読み手の目標や意図がなければ行われなければならないことを支持する証拠はない。これらの理由から、ここでは狭い文脈だけを文脈として扱う。つまり、

定義1：文脈とは、標的語を含んだ容認可能な文（文を統語的に解析して分解した一部を含む：以下同様）から標的語を除いた部分である。

さらに、提示された文脈の中で語彙を解釈することと、新たな文脈の中で語彙を用いることは同じモデルで扱うべきであった。そこで、

定義1の補足1：文脈のうち学習者が自ら生成した文脈を内生的文脈といい、学習者以外が生成して学習者に提示した文脈を外生的文脈という。また、標的語だけを単独で用いる場合の文脈を特にゼロ文脈という。

B 外国語に特有の問題

このモデルでは外国語と母語を比較したときに見られる外国語の語彙獲得の困難を両者の本質的な差異からのものであり、知識量など他の要因には還元せず考へる。すると極端な対連合学習にみられる「外国語の単語は母語の単語によって1対1対応で表される」というナイーブな観点が重要になると考へられる。つまりA、Bという語彙が単一言語内のものであるときには「AはBであ

る」という言明はそのままでは成立しにくく、修辭的な言明であるとみなされやすい。一方A、Bが異なる言語であるときには修辭的な言明であるとはみなされにくい。この非対称性をモデルにもりこむために文脈の中でも次の文には特別な地位を与える。つまり、
定義1の補足2：異なる言語間の語彙の対応について述べた（eg. Aはaである、b means B.）陳述を特に定義的文脈という。

C 語彙の獲得と使用

比喩的な言語の研究は、語彙を獲得することと使用することは同様に扱うべきであることを示している。また語彙の獲得は漸進的と考へるべきであった。そこで、
定義2：標的語を外生的な文脈の中で使用するということは、標的語を含む単語列のうち容認可能な単語列を容認し、容認不可能な単語列を排除することである。また標的語を内生的な文脈の中で使用するということは、標的語を含む容認可能な文を産出することである。
定義3：文脈の中で使用することによって標的語についての知識が増加するということは、次回に学習者が標的語を文脈の中で正しく使用する確率が高くなるということである。語彙を獲得するというのは、知識獲得が進行した結果、次回にその語彙を正しく用いることができる確率が十分に高くなった状態を指す。

D 必要な認知的機構

先行研究や他の分野の知見から容認可能であって、このような定義のもとで語彙の獲得を実現するために必要な認知的機構はどのようなものであろうか。

先行する研究のうち機構論的に語彙獲得を扱った研究のうち、Elshout-Mohr and van Daalen-Kaptein (1987)では、既存の語についてのモデルとした理解、脱文脈化、意味の組み立てという3段階の処理を仮定している。Sternberg (1987)のモデルもこれと似ており、文脈をコード化した後に定義と結合して既存の記憶と照合するという処理を仮定している。

本稿でも基本的にはこれと同様の処理を仮定する。仮定する機構は、長期記憶と作業記憶、類似性計算モジュール、統語処理モジュールと推論機構で、これらは受け入れがたいものではないと考へられる。類似性については、人間の直観において対象間の類似性・非類似性は明らかであるものの、論理的にはこのような対象間の類似性の一致は導くことができない（渡辺, 1986）、ということが指摘されている。これは人間の類似性判断が人間という種に固有の何らかの認知過程によっていることを示唆

している。また統語処理についてはこれをモジュールとする見解は根強い(たとえば、フォーダー、前掲書)。推論過程とは標的語のもつ属性を変えることであり、属性の集合に対してつけた名称をラベルとするのが基本的操作である。

E LIP (Label-Instance-Prototype) 仮説

以上の道具立てで文脈の中での語彙の獲得と処理を説明することができる。以下にその概略を示す。

1 通常の読み: まず、ある文が提示されると、その文は既に知っている文(長期記憶から直接検索できた文、あるいは長期記憶中の語彙と構文規則からつくられる容認可能な文)のうち、最も類似性の高いものと比較される。類似性が十分に高いときは知識の変容(その語を用いることができる意味範囲の改定)が起きない。

2 定義を用いる新奇な語の獲得: その中に1つだけ新奇な語が入っていて、辞書を用いてその後を獲得する場合は、既に知っている文との比較の結果、類似性が十分に高くない。このようなときは、まずそれを容認し(語彙の使用1)、統語モジュールからその語彙のとれる意味範囲のうち、統語的に可能である部分を確定する。次いで定義的な文脈を利用してそれを新奇な語彙の意味のラベルとし、ラベルに付属している属性を新奇な語彙に転移させる(語彙のラベリング1)。このラベリングの段階が対連合学習が扱う範囲である。そしてそのラベルに付属した情報と統語モジュールからの出力で入力文を解釈しなおし、その語が容認可能である範囲を改定(語彙の使用2)した上で、使用の事例を貯蔵する。

3 定義と文脈から新奇な語の獲得: 上記の過程に加え、辞書に載っている典型的な使用例は容認すべき事例として扱う(語彙の使用3)、それにラベルをあてはめて解釈し(ラベリング2)、新たな文脈における語彙のとれる意味範囲を改定して貯蔵される事例を増やす。学習はこのような、新たな意味範囲の事例を記憶することで進行する。

4 語彙を外生的に使用する場合: 定義的文脈やゼロ文脈で用いる場合(ラベリング)は、既に行ったラベリングの結果の想起と、保持している事例からのプロトタイプ形成が平行して行われる。つまり記憶している事例がその語の意味範囲を適切に被覆している程度に依存する。それ以外のときはラベルを手がかりとして使用する場合は意味範囲が参照されず、ラベルに付属した言語的情報と統語的知識によってその語彙が使用される。ラベルを手がかりとしないときには、その語の意味範囲を規定している事例を想起してそれと類似性の高い文脈を作成す

る。

5 比喩的な文脈での使用: 新奇な語彙の獲得と基本的には同じ過程になる。ただし、語の容認可能な範囲を改定する段階で既有知識を参照するかどうかという問題になる。

F さまざまな現象の説明

以上の道具立てによれば、語彙獲得において見られる多くの経験的事実を統一的に説明できることを示す。

1 辞書からの語彙の獲得 (Nist and Olejnik, 1995): Nist and Olejnik (1995) は、解りやすく書き改めた(個々の説明語をばらばらに提示するのではなく、どのように統合するかに配慮する、など)辞書と解りにくい辞書を使って語彙の学習を求め、その結果を定義を選択する課題と例文を作る課題で評価したところ、定義選択課題ではどちらの辞書を使っても正答率に差はなかったが、作文課題では解りやすい辞書のほうが成績が良かった。これは語彙のラベルを獲得した後の意味範囲の改定過程が解りやすい辞書の記述によって容易になった結果であると説明できる。

2 文章と辞書の効果 (Fischer, 1994): Fischer (1994) は文章中の新奇な語の意味の学習を求めた。条件は、新奇な語が入った別な文章を用いる文章群、辞書を用いる辞書群、両方用いる混合群である。しかし、新奇な語を用いて作った新しい文が容認可能であるかどうかを問う課題では成績に群間差がなかった。一方、定義を母語で説明する課題は文章群だけが成績が低かった。これは語のラベリングが成功しないときでも意味範囲の推論が十分に行われていると解釈できる。

IV さいごに

本稿では多くのスペキュレーションを交えながら、語彙、特に外国語語彙の獲得を扱う包括的モデルを提案してきた。しかし、残されている課題はまだ多い。ここでそのような残された問題について触れておく。

A 実行可能な手続き化

今回のモデルはまだ完全に実行可能な手続き化されているわけではない。しかしそのような方向に進むことを念頭においているので不可能ではないと考えられる。類似性や統語モジュールの計算をどのように扱うのか、改定されるべき知識内容をどのように表現するのかといった、多くの言語獲得プログラムのもつ問題はここにもある。

B 個人差の反映

言語獲得、特に外国語の獲得における問題は、それが普遍的な機構を要求しながらもときに普遍性を覆い隠さんばかりの個人差を見せる点であろう。日本人高校生に対して英語を教えている谷口(1996, 私信)は高校生の辞書の使用方略について「最近の生徒は、以前にもまして、英語 - 日本語を一対一対応させる傾向が強いように思います。この一対一の発想から抜け出せずに高校での英語学習に困難を持つ生徒がとて多いように感じています。」と述べている(9月23日, 英語教育メイリングリストでの発言)。このモデルにおいて個人差の入る余地は作業記憶容量や改定した語彙の知識表現など様々にあるのだが、果たしてそれがこれほどに質的な差異を産み出せるのかどうかということについては検討する余地がある。そしてコンピュータシミュレーションはその際に威力を発揮することになるだろう。

C より根本的な理論への接続

さらに、本稿で提案した進んだ学習者における外国語獲得のモデルは、このような強固な「古典的」見解がなぜ生まれるのかは進んだ学習者を対象にしているこのモデルでは説明することができない。つまり、「なぜ外国語の初期学習が成立するのか」、あるいはさらに「なぜ言語の初期学習が成立するのか」という問題は本稿で提案したモデルの妥当性や適用範囲をみる上で重要なものである。このような説明とのさらなる整合性が望まれるであろう。

(指導教官 大村彰道教授)

引用文献

- Beck, I.L. McKeown, M.G. and Omanson, R.C. (1987) The effects and Uses of Diverse Vocabulary Instructional Techniques. In: M.G. McKeown and M.E. Curtis (eds.) *The Nature of Vocabulary Acquisition*. LEA, New Jersey.
- Cacciari, C. (1993). The Place of Idioms in a Literal Figurative Distinction. In: C.Cacciari & P. Tabossi (eds.) *Idioms: Processing, Structure, and Interpretation*. LEA, New Jersey.
- Chall, J.S. (1987) Two Vocabularies for Reading: Recognition and Meaning In: M.G. McKeown and M.E. Curtis (eds.) *The Nature of Vocabulary Acquisition*. LEA, New Jersey.
- Elshout-Mohr, M. and van Daalen-Kapteijns, M.M. (1987) Cognitive Processes in Learning Word Meanings. In: M.G. McKeown and M.E. Curtis (eds.) *The Nature of Vocabulary Acquisition*. LEA, New Jersey.
- Fischer, U. (1994) Learning words from context and dictionaries: An experimental comparison. *Applied Psycholinguistics*, 15, 551-574.
- Fodor, J. (1983). *精神のモジュール形式*. 産業図書.
- Graesser, A., Singer, M., and Trabasso, T. (1994). Constructing Inferences During Narrative Text Comprehension. *Psychological Review*, 101(3), 371-395.
- Glucksberg, G., Brown, M. and McGlone, S. (1993). Conceptual metaphors are not automatically accessed during idiom comprehension. *Memory and Cognition*, 21(5), 711-719.
- 東信行 (1995). 辞書学の誕生. 月刊言語, 24(6), 20-29.
- 今井むつみ (1993). 外国語学習者の語彙学習における問題点 - 言葉の意味表象の見地から -. 教育心理学研究, 41,3, 243-253.
- 河原哲雄 (1992). 概念獲得研究の現状と課題. 東京大学教育学部紀要, 32, 233-241.
- 川上綾子 (1994). 語彙 - 概念関係における第二言語の習熟度の影響. 心理学研究, 64(6), 426-433.
- Kilborn, K. (1992). On-line Integration of Grammatical Information in a Second Language. In: R.J.Harris (ed.) *Cognitive Processing in Bilinguals*. Elsevier Science Publishers, Amsterdam.
- Knight, S. (1994) Dictionary Use While Reading: The Effects on Comprehension and Vocabulary Acquisition for Students of different Verbal Abilities. *The Modern Language Journal*, 78, 285-299.
- Mauguaschca, R.U. (1993). Teaching and Learning Vocabulary in a Second Language: Past, Present, and Future Directions. *The Canadian Modern Language Review*, 50, 83-100.
- 松見法男 (1993) 第2言語の発語における単語の検索過程. 教育心理学研究, 41(4), 424-434.
- McKoon, G., and Ratcliff, R. (1992). Inference During Reading. *Psychological Review*, 99(3), 440-466.
- Nayak, N.P., and Gibbs, R.W., Jr. (1990). Conceptual knowledge in the interpretation of idioms. *Journal of Experimental Psychology: General*, 119, 315-330.
- Pavio, A., and Desrochers, A. (1980). A dual coding approach to bilingual memory. *Canadian Journal of Psychology*, 34, 390-401.
- Pressley, M., Levin, J.R., and Delaney, H.D. (1982). The mnemonic keyword method. *Review of Educational Research*, 52, 61-92.
- ピリシン, Z. (1984). *認知科学の計算理論*. 産業図書.
- Spalding, T.L. and Ross, B.H. (1994). Comparison-Based Learning: Effects of Comparing Instances During Category Learning. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*. 20(6), 1251-1263.
- Sternberg, R.J. (1987). Most Vocabulary is Learned From Context. In: M.G. McKeown and M.E. Curtis (eds.) *The Nature of Vocabulary Acquisition*. LEA, New Jersey.
- Takahashi, S. and Roitblat, H.L. (1994). Comprehension process of second language indirect requests. *Applied Psycholinguistics*, 15, 475-506.
- 渡辺慧 (1986) 知ること 認識学序説. 東京大学出版会.